

全国肉用牛振興基金協が総会、森田課長、佐藤機構理事長が祝辞

一般(社)全国肉用牛振興基金協会(小里貞利会長)は25日、平成27年度定時総会を開催し、提出3議案と27年度事業計画などの報告が行われた。総会で小里会長は「畜産情勢は担い手や後継者不足、円安による飼料価格高の影響から、肉用牛の頭数や素牛不足など生産基盤が弱体化している。TPP交渉は予断を許さない情勢にあり、政府においては衆・参国会の決議をしっかり守ってほしい。国は前年を上回る予算を確保し、弱体化した畜産基盤の強化のため畜産クラスター事業を中心に据えて取り組む方向にあり、酪・肉近代化基本計画では繁殖牛の拡大に向け取り組んでいた。また農水省内に畜産再興プラン実現推進本部を設置し基盤強化に取り組んでいた。また農水省は協会としても政府と一体となり肉用牛の生産基盤の強化に積極的に取り組んでまいりたい」と(早川副会長代読)とあいさつ。来賓では農水省食肉鶏卵課の森田健児課長が「繁殖基盤が弱体化して、肉用牛は枝肉高で子牛も高いが、農水省としては酪・肉近代化基本方針を示し、繁殖雌牛と酪農の基盤強化、自給飼料の増産に取り組んでいる。また500億円の予算化で畜産クラスター事業の推進などに取り組んでいる」、農畜産業振興機構の佐藤純二理事長は「26年度は補給金制度の発動もなかったが、加入者は3割減った。これは繁殖基盤の弱体化のためである。子牛価格は63万円を超えており肥育経営への影響は深刻なものになっている」とそれぞれ祝辞を述べた。

東京Xアソシエーションが食育全国大会に出展、豚の試食好評



内閣府と墨田区主催による「食育推進全国大会inすみだ2015」がこのほど2日間にわたり開催され、東京Xアソシエーションも参加した。全国大会は、江戸東京博物館、国際ファッションセンター、墨田区総合体育館と錦糸町ふれあい広場を会場に行われ、東京Xアソシエーションは錦糸町ふれあい広場に出展し「東京X豚」の肉2頭分が2日間で2500人分提供され、東京都で開発された究極の豚肉であることをアピールした。今回の大会テーマは、「夢

をカタチに！未来につなぐ豊かな食育。手間かけて食で育む人とまち」で、東京Xは2020年の東京オリンピック・パラリンピックに向けて多くの都民に「東京X豚」の開発コンセプト、飼料米を給与していることやアニマルウェルフェアを説明し、世界でも通用する究極の豚肉であることを訴えた。東京Xアソシエーションの植村光一郎会長は「東京が世界の舞台になる東京オリンピックでは、アニマルウェルフェアなどの生産工程の適正化が求められる。コンセプトとして掲げている『Safe [Safety] Biotic [Animal welfare] Quality』が真価を発揮し、各国から訪れる方たちに最高の食材であることが認められるだろう」と語った。食育大会では、北海道の北里大学八雲牧場の短角牛の出展もあり、それぞれ生産工程のこだわりをアピールしていた。